



生涯学習センターだより

2026. 8. 28 (金) 2026 年度第 1 号 (8 月号、通巻 46 号)

発行: 秋田県生涯学習センター



気づく喜び

所長 櫻田 洋子

今年度の「あきたスマートカレッジ」に新しく登場した講座の1つが「絵本で広がる新たな教養講座～大人にこそ絵本を 大人が楽しむ絵本への誘い～」である。5月に開催された第1回の講座では、絵本を読み、講師の先生の巧みな問いに導かれて、自分でも気づいていなかった感情や忘れてしまっていた想いを知る、という素敵な体験をさせていただいた。第2回の開催は11月になるが、次の講座が今から大変楽しみである。

ここで、個人的に大好きな絵本を紹介したい。安野光雅の『旅の絵本』は私が小学2年生のときに出会った本で、1977年に第1作が刊行された「文字のない絵本」シリーズである。緻密で繊細な絵だけで構成されており、馬に乗った1人の「旅人」が美しい風景の中を旅していく様子が淡々と描かれている。「天使の視野」と称される俯瞰図が特徴で、この視点により、広大な自然や街並み、そこで暮らす人々の細かな営みを、まさに「鳥」になったような気分で眺めることができる。しかも、美しい風景だけでなく、随所に遊び心あふれる隠し絵が描かれており、おとぎ話の主人公や名画のオマージュ、歴史的なエピソード、ときには「だまし絵」のような仕掛けが隠されている絵本である。シリーズ第1作目の『旅の絵本』（中部ヨーロッパ編）を見て、小学校低学年の私が一番最初に気づくことができたのは、童話『赤ずきん』の登場人物達の姿であった。その後何度もこの絵本を手にとったが、その度に新しい発見があったり、それぞれのシーンに対する自分の中の印象が変わったりと、表紙を開く毎にワクワクしたことを覚えている。大学時代に留学した際には、この絵本のシリーズを数冊もって渡米したが、留学生仲間のフランス人の友人が、私が全く認識していなかったゴッホの絵画をさっと見つけたときには、素直に感心した。このように、この絵本は、読み手の知識、教養、興味関心、注意力などに影響されながら、その都度見え方が変わる本である。

早いもので、この絵本に出会ってから半世紀以上が経ったが、それぞれのシリーズにどれほどの「秘密」が隠されているのかという「正解」を調べたことはない。巻末の解説を参考にして探すことは可能だし、ネット上には「ネタバレ」情報があふれている。しかし、今まで見過ごしていたことに自力で気づいたときの、なんとも言えないうれしい気持ちや台無しにするなんて、そんなもったいないことは絶対にしたくないからだ。気づきは自分の世界を独力で広げていく手応えを感じさせてくれる貴重な体験であり、その感覚は何にも代えがたい。だからこそ、私たち人間は知識を求め、思考し、新しい発想を得て、さらに学びを深めてきたのかもしれないし、このことこそが人類の進化と存続を可能にしてきたのかもしれない、とさえ思ってしまう。

当センターが今後も県民の皆様の楽しく、深い「気づき」と「学び」に貢献していければ幸いである。



第1回あきたWith杯モルック交流大会

8月2日に障害の有無にかかわらず、誰もが共に楽しむことができる「モルック」を通して交流を深めるイベントを実施しました。昨年度の体験交流会を経て、あきたWith^{*}の共催により、今年度「第1回あきたWith杯モルック交流大会」として開催し、大会には16チーム、63名が参加しました。

今大会では、障害のある方から小さな子どもまで安全に楽しめるように、紙製のモルックを使用したほか、正規のコートよりもコートサイズを小さく、モルックを投げる位置を参加者の実態に応じて調整するなどの工夫をしました。ゲームが始まるとチームの仲間の応援だけでなく、対戦チームのナイスプレイにも歓声や惜しめない拍手が送られました。「モルック」というスポーツとしての面白さに加え、参加者同士が言葉を交わし、楽しい時間を共有することで、会場全体が笑顔に包まれました。

※あきたWith:秋田県生涯学習センターの学習活動の趣旨に賛同した県内企業で構成された非営利任意団体



ねらったとおりにスキttlを倒して、モルックの楽しさを実感!



モルックの投げ方は自由。スキttlをねらって、モルックを投てき!



ナイスプレイには会場がー体となり、みんなで拍手!

令和8年度 第1回市町村・公民館等職員専門研修

7月22日、県内の生涯学習・社会教育関係職員や公民館、市民センター等社会教育施設の職員に求められる資質や力量を高めることを目的として「地域のつながりづくりを支える社会教育の展開」をテーマに、今年度1回目の研修を行いました。

前半は、秋田県生涯学習センター社会教育主事 **和泉 洋介** が、【「正解を守る」から「最適を創る」へ ～誰もが主役になれる学びの場のデザイン～】と題して講話を行いました。はじめに、各社会教育施設でユニバーサルスポーツを企画する際に、「障害理解に関する専門知識がない」「スペースが狭い」「施設が古い」といったためらいがあることに対し、「視点を切り替え、今あるリソース(資源)を最大限に活かした環境づくりや場づくりを考えてみませんか。」という提案をしました。続いて、後半に行うボッチャのコート作りについて説明を行いました。その中で、限られたスペースの中で、多様な参加者が楽しめるコートにするという条件がつけられました。最後に、多くの人々が楽しめるようにするためには、「人が標準(ルール)に合わせるのではなく、環境の側が多様な選択肢を用意し、様々な立場の人が自分で条件を選べるようにすることが求められる。」と述べました。

後半は、3グループに分かれ、「ボッチャの公式なコートが設置できない限られたスペースで、車椅子を利用する人、椅子に座って投球する体力が低い人、ルールがよくわからない元気な児童など、多様な参加者が楽しめる『最適』なコートを手作りする。」というミッションに取り組みました。Aグループは、コートの設計を行った後、コート作りに取りかかりました。さらに、実際に車椅子などを使ってプレーをして確認し、修正を加えながらコートを作りました。Bグループは、ボッチャを体験することから始め、それからコートの設計に取りかかり、最終的に、横長の長方形のコートを完成させました。Cグループは、実際にコート作りに取りかかった際に、設計を大幅に変更して全面をプレイイングエリアとする正方形のコートを完成させました。3グループとも参加者一人一人が積極的に意見を出し合い、試行錯誤しながらそれぞれの工夫を盛り込んでミッションに取り組んでいました。今回の研修は、講話と体験がセットになっていたため、より具体的に理解したり、想像したりしながら学びを深めることができた研修であり、参加者の感想から、今後、各市町村での具体的な取組が増えていくのではないかと感じました。



「令和8年度 第2回家庭教育支援指導者等研修実施報告」

7月16日、「郡山家庭教育を支援する会」の教育相談委員会委員長 **圓谷 円(つむらや まるみ)** 氏に「ペアレントトレーニングで学ぶ、親と子の幸せなかかわり方～子どもの自信を育む、大人のステップアップ～」というテーマでお話いただきました。はじめに、ペアレントトレーニングとは、親子関係を悪循環から好循環へと導くための具体的なアプローチを体験的に学ぶ手法であることが紹介されました。親が「怒鳴らず・驚かせず・待てる」ようになることで子育てに自信をもち、子ども自身も感情をコントロールする力を育む効果があり、このような子どもの心の育ちの土台となる「基本的信頼」は、乳幼児期における日々の関わり(薄い和紙を積み重ねるような関わり)によって育まれるとの説明がありました。続いて、親子関係を好循環へ導くためのペアレントトレーニングの概要についてDVD視聴後に意見発表をしながら学びました。演習前のグループワーク(6人)では、自己紹介や日頃の支援活動について情報交換を実施し、参加者間のネットワークを深め、ロールプレイに向けて心をほぐす貴重な機会となりました。その後の演習では3人グループに分かれ、セクション3(6段階のペアレントトレーニングの1つ)「効果的なほめ方」のロールプレイを親役・子ども役・コメント役に分かれて実施しました。ただ褒めるだけでなく「理由を具体的に伝えて褒める」「良い結果を与える」というステップを実践し、肯定的な関わり方を体験的に学びました。

午後からは、6段階のペアレントトレーニングのセクション5「問題行動を正す教育法」および、セクション6「自分自身をコントロールする教育法」の2つに関する講話と演習が行われました。セクション5では、兄弟喧嘩や勝手な外出などの場面を想定し、ロールプレイを実施しました。共感的に介入すること、子どもが「しまった!」と思う体験を与えること、してほしい行動を説明し練習させるというステップに沿って、冷静に対応するスキルを磨きました。続くセクション6では、親自身が怒りを爆発させないための「落ち着くヒントプラン」を作成し、ロールプレイを実施しました。子どもが反発した場面でも、深呼吸などの落ち着くアプローチを親が実践し、子どもにもその方法を教え練習させる手順を学び、現場の家庭教育支援にも活かせる深い気づきを得る時間となりました。また、各セクションのグループ演習後に、代表グループによるロールプレイの発表が行われました。参加者は他のグループの多様な関わり方やアプローチを共有できたことで実践的な対応の引き出しが増え、大変参考になった様子でした。

